

気象庁によりますと平成26～27年のオホーツク海の最大海水域面積(もっとも広がった時点の面積)は、昭和45～46年の統計開始以来、最小になったようです。海水域面積は年により大きく変動していますが、長期的には緩やかに減少しているとのこと。5月下旬の網走沖の海面水温は平年より高く、この状態は春先から続いているようです。水産研究本部が行った4月の海洋観測の結果では、オホーツク海沿岸に沿って流れる宗谷暖流(指標:水深50m層水温4℃以上)の影響は網走沖まで見られ、水温は宗谷暖流の流域である沿岸で平年よりも2～4℃高く、沖合で平年並みとなっています。

▼No.38でも書きましたが、今年は海明けが早く、沿岸の水温は高い状況が続いているようです。例年5月中旬以降に始まるホタテガイの採苗が、今年は5月の初旬から本格的になっているようです。網走西部地区及び網走東部地区水産技術普及指導所が行っているプランクトンネットによるホタテガイ浮遊幼生の採集調査では、4月末には採苗器に付着するサイズの大型の幼生がすでに出現しており、5月上旬の試験採苗器にはかなりの数の幼生の付着が見られていました。これらの幼生を漁業者がうまく捕らえて稚貝まで育て、放流することが、その後のホタテガイ漁業の大事なスタートになります。しかし、このホタテガイ幼生の採苗が毎年順調にいくとは限りません。過去に何度か採苗の不振な年がありました。また、水産技術普及指導所が行っている浮遊幼生の調査結果は重要な情報となっていますが、浮遊幼生の調査や計数には多大な労力がかかります。網走水試では平成24年度からオホーツク海における採苗安定化のための試験研究を実施してきました。これまでに幼生の少ないオホーツク海表層水の沿岸への侵入などが原因で採苗不振が起こることやホタテガイとイガイを同時に免疫染色することによって画像解析により半自動的に幼生を識別して計数する技術などを開発してきました。平成27年度以降もこれら技術のさらなる精度向上を目指して試験研究に取り組んでいきます。

▼今年3月で水産試験場は地方独立行政法人化してから5年が経過し、4月からは第2期目の中期計画に入っています。平成22年4月に農業試験場や工業試験場など道立の22の試験研究機関が一緒になって、地方独立行政法人北海道立総合研究機構(道総研)となり、試験研究機関としての総合力を発揮して道内産業や道民の暮らしの向上に貢献する取組を進めてきました。現在研究職員は約720名、研究開発だけでなく様々な技術支援にも取り組んでおります。網走水試がある水産研究本部でも第2期目の中期研究計画を策定して研究に取り組んでおります。網走水試では地域の基幹であるホタテガイ漁業について生産から加工や廃棄物の処理・利用までの一貫した研究を重点的に進めることとしています。今後ご支援や調査へのご協力をお願いするとともに、道総研全体の利用をお待ちしています。なお、道総研各研究本部のホームページが4月から統一され、見やすくなりました。お役立ていただければと思います。(網走水試 上田)